

出生順位の視点から見た保護者の子育て観

西尾 優花*・村田 晋太郎**

Parents' Views of Child Caring from the Perspective of Birth Order

Yuka Nishio* and Shintaro Murata**

要 旨

本研究の目的は、子育てをする保護者5人に対する半構造化面接法によるインタビュー調査を通じて、過去の子育て観によって育てられた現代の子育て世代はどのような子育て観を持っているのかについて、出生順位の視点から明らかにすることである。結果として、現代の子育て観がつくられた背景には、①育ってきた環境、②生き方やこだわり、③日常的な経験があることが推察された。また、幼児期から将来への期待の変化で見ると、過去の子育て観では第一子の男子のみ期待が高いまま変化がなかったが、現代の子育て観では、第一子のみ期待が高い幼児期から、将来的に見れば、きょうだい同士がお互いに支え合うような存在になってほしいと期待していた。現代の子育て観には出生順位による期待の差異はほとんどなく平等に期待されるようになったことが示唆された。

キーワード: 子育て観, 出生順位, インタビュー調査, 個人化, 期待

1. はじめに

日本では、合計特殊出生率が1990年に1.57となり「1.57ショック」と呼ばれ、日本全体で少子化を問題と捉えた。2022年は1.26と現在も低い水準を保っており、子どもが少ない社会であると言える。そのような社会全体でどのように子育てを進めていけばいいのだろうか。そもそも子育てとは、保護者が、養育が必要な主に乳幼児期の子どもの成長を助け、社会に必要な力を育てることである。夫婦はそれぞれが信念や子育てへの考え方を持ちながら子どもに関わっており(安保ら, 2020)、角野・藤崎(2022)は、「子どもを育てることについての考えや信念」のことを子育て観と呼んでいる。つまり、保護者は養育する子どもに対して、「どのような成長をしてほしいか」「そのためにどのように子育てをするか」というような子育て観を持ち、子育てをしていると言える。

宋戸ら(2016)は、母親の子育て観の因子分析結果として、「子どもが言うことを聞かないのでイライラする」などからなる育児ストレス、「他の子が出来て自分の子が出来ないことが多い」などからなる育児不安、「子育ては楽しい」などからなる子育てポジティブ、「自分ひとりで子育てをし

ていると感じる」などからなる子育て孤独感の因子が子育て観をつくることに影響していることを明らかにしている。子育ての経験によって感じる不安や楽しさなど、つまりは日常的な子育てに関する営みそのものが子育て観をつくっていると言えるだろう。一方、子育て孤独感や育児不安の背景として櫻谷(2004)は、「母親なら子どもをちゃんと育てるのは当たり前」という周囲からの母性愛神話が根強く残るなかで、母親たちは一人で育児を背負い込み、精神的に追い詰められてしまうということを挙げている。子育ての主体が母親・女性であるという社会全体の規範意識が子育てを実践する母親の孤独感や不安感を高める要因となっているだろう。時代による社会の様子が子育て観に影響していることについて、落合(2019)は、日本では農業社会からサラリーマン社会に転換するときに「子どもの価値」が「生産財」から「消費財」へと変化したことを述べている。農業社会の時代では、子どもは労働者として扱われていたが、サラリーマン社会に転換するとき、子どもは保護者にとっての楽しみとなり、耐久消費財として大切に育てられるようになった。母性神話が根強く残りつつも、時代による社会の変化により子どもに対する価値が変わったこと

*名張市立北中学校

**三重大学 教育学部

で、子育て観そのものも影響を受け、少なからず変化していることが推察される。

2. 世代による子育て観の違い

厚生労働省の人口動態調査によると、2019年の第一子から第三子を出産時の母の平均年齢(図1)は30.7~33.8歳であることや、インタビュー対象者である乳幼児期の子どもをもつ保護者の年齢が30~40代であったことから、現在(2022年)から30~40年前の1980年~1990年代生まれを現代の子育て世代と推定することができる。また、1980~1990年に第一子から第三子を出産した母の平均年齢は26.4~31.8歳であるため、1980~1990年代の保護者をその20~30年前の1950~1970年代生まれと推定する。そして、その1980~1990年代の保護者の世代を過去の子育て世代とする(図2)。

また、1950~1970年代生まれの保護者は、ちょうど高度経済成長期(1955年頃~1973年)に生まれたと言える。そして、この高度経済成長期を背景に1960年代以降に、性別役割分業意識が強まってきたと言われていることから、そのような意識がある中で育てられてきたと言える。さらに、1991~1993年頃にかけて起きたバブル崩壊による不況の中で子育てをしていたと言える。つまり、1980~1990年代に子育てをしていた保護者世代(1950~1970年代生まれ)は、性別役割分業意識が強まってきた社会で育てられ、かつ、社会が不況の中で子育てをしてきたと言える。

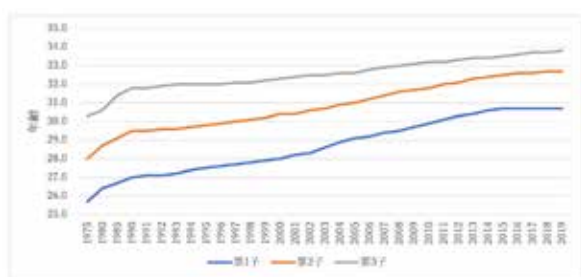


図1 母の出生時平均年齢
(厚生労働省、人口動態統計特殊報告、令和3年度より筆者作成)

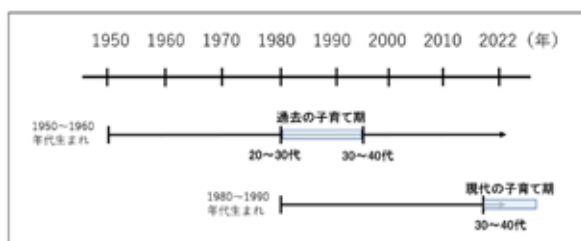


図2 過去と現代の子育て期の推定

2.1 過去の子育て観

過去の子育て観として、苫米地(2012)は、家庭環境が同じでも、出生順位の早い子どもの教育投資が高くなることを明らかにしている。その理由の1つとして、長子は他のきょうだいよりも保護者と関わる傾向があることや家を継ぐ存在としてみなされることが多いことから、保護者が教育投資をした分の費用や資源のリターンを考慮していることが挙げられるという。つまり、長子を重要視した子育てであると言える。また、森岡・望月(2009)は、「直系制家族」として後継ぎを男子に限り、男子を優先させると家族について解説をしている。浜崎・依田(1985)によると、親は第一子に対して自立を期待した態度でしつけをし、三人きょうだいの場合は第二子にも自立を期待する気持ちが強いが、末子には「かわいらしい子ども」を期待し、いつまでも子ども扱いにする傾向があるという。このように出生順位によって自立を期待したり、子ども扱いしたりするなど子育て観が異なっていると言えるだろう。

以上の先行研究から、過去の子育て観として、「出生順位によって期待に差異があり、長子・男子をより期待し、大切に育てる」傾向であると言える。しかし、子育て観とは、「子どもを育てることについての考えや信念」(角野・藤崎, 2022)と広範囲に定義されるため、過去の子育て観については、出生順位や性別の側面からは明らかになっているものの限定的であり、かつそれらの子育て観を形成する要因については明らかとなっていない。以上のような過去の子育て観のもとで育てられたのが、現代の子育て世代に当たる。では、現代に子育てをしている世代の子育て観とはどのようなものであるのだろうか。

2.2 現代の子育て観

苫米地(2012)によると、現代の日本社会において、長男が特別な意味を持たなくなっていると言われている。一方で、ジェンダー格差は依然として存在し、女性よりも男性の方が、教育達成が高くなるという。現代のジェンダー格差について、日本には性別役割意識が依然として残っていることが挙げられる。内閣府(令和元年9月)の世論調査によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識で「賛成」、「どちらかといえば賛成」と答える者の割合が1992年には60%を超え、過半数の者に性別役割

分業意識があることが読み取れる。さらに、2019年になり、以前よりは減少したものの、35%の者が賛成側にあることから、未だに性別役割分業意識は残っているとと言えるだろう（図3）。さらに、世代別の「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識調査（内閣府、令和元年9月）によると、現代の子育て世代である30～40代において「賛成」、「どちらかといえば賛成」と答える者の割合は30～35%に及ぶことから、同様のことが言えるだろう（図4）。

また、堤ら（2021）は農家を対象とした調査によって、「1977年の継承意識は、対象世帯の多くで保護者側の『継承させたい意識』が強かったが、2018年では、子どもの意思を尊重する方向に変化してきた。」という。つまり、現代の子育ては、従来のような出生順位によって差異がなくなってきたと言えるのではないだろうか。ただし、堤らの調査は農家のみを対象とした調査のため、限定的な家族を対象としたものである。

以上より、出生順位などによって子どもへの期待に差異があるという過去の子育て観で育てられた現代の子育て世代の子育て観はどのように形成され、どのような考えや信念なのだろうか。

そこで、本研究の目的は、現在子育てをする保護者へのインタビュー調査を通じて、過去の子育て観によって育てられた現代の子育て世代はどのような子育て観を持っているのかについて明らかにすることである。

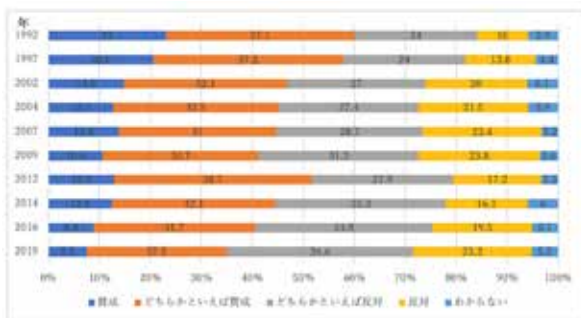


図3 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識
（内閣府、男女共同参画社会に関する世論調査、令和元年度より筆者作成）

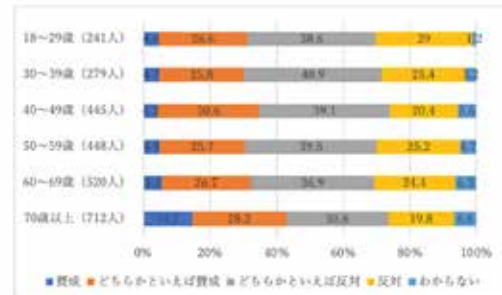


図4 世代別「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識
（内閣府、男女共同参画社会に関する世論調査、令和元年度より筆者作成）

3. 研究方法

3.1 調査対象者

対象は実際に子育てをしている乳幼児期の子どもの持つ保護者5人である。対象者の1人は、子どもが1人であったが、その他の保護者は2～3人の子どもを育てている。インタビュー対象者5人の年齢は30代前半から40代前半であった。なお、インタビュー対象者のプロフィールは表1の通りである。

年代	性別	対象者のきょうだい構成	対象者の子どものきょうだい構成	調査日	調査方法
A 40代前半	男性	姉・A（次男）・弟・弟	長女（3歳）・次女（1歳）	2022年2月16日	オンライン
B 30代後半	男性	兄・B（次男）・妹	長男（3歳）・次男（1歳）	2022年2月16日	オンライン
C 30代前半	女性	C（長女）・弟・妹	長女（3歳）・次女（10か月）	2022年2月22日	オンライン
D 30代後半	女性	D（長女）・弟・妹	長女（14歳）・長男（9歳）・次女（2歳）	2022年2月28日	オンライン
E 30代前半	女性	姉・兄・E（長子）	長女（2歳）	2022年9月28日	対面

保護者A

Aの妻は次男が0歳11か月になる前まで育児休業を取っており、その後Aが交代し育児休業を取っている。Aは育児休業約10か月目で、元々Aは妻と共働きである。育児休業中のAは、今は子どものことについて全般を担っているという。子どもの身長体重、何をどのくらいできるかもわかるし、ご飯については育児休業を取る前はAと妻で1:9の割合で作っていたが、今は6:4程度の割合で作っているという。また、夫妻は、仕事以外のほとんどの時間を家族と共に過ごすようにしている。一方で、日常的に継続して子育てしていると息も詰まるため、月に1回程度夫婦で互いに自由な時間を設けるようにしている。さらに、夫婦で互いに子育てで大事だと思ったところは真似をし合うようにしている。

保護者B

Bは育児休業11か月目であり、育児休業を取

ったことで、妻と子育てについて意見を言い合えるようになったという。それまでは、Bは教育方針について思うことがあっても妻が子育てを一生懸命やっているから口出しだけされるのは嫌だろうと考えていた。今では、お互いに影響を受けながら、コミュニケーションを頻繁にし、子育てしている。また、B自身の長男を見てきた経験や、B自身の子育て実践の中で、長男は愛情の表現がしにくくなるのではないかと思ったことから、それをBの妻とも共有し、長男が甘えさせてあげられるように意識している。

保護者C

Cが育休前に行っていた職場が人権に力を入れていたという。そのため、他の人の子育てを見ていてジェンダーに関することについて違和感があると思うこともあると語る場面があった。育休を取る前は共働きであった。基本的に子どもが自分たちで解決できるようにし、手伝ってほしいことがあればCに言うように子どもに言うため、子どもが自ら手伝ってと言えるようにしている。

保護者D

Dは子どもと関わりのある会社を経営している。子どもに関わる仕事をしようと思った理由の一つとして子育てが楽しかったからという。さらに、現在の仕事をするまでに、ベビーサインの先生や保育士の資格を取るなどをしている。Dは自身が長女であることから、自分の子どもに対しても長女の気持ち共感できるという。そのことから、長女に対してD自身が嫌だったなど思ったことはしなかったり、長女を優先的に接したりすることを意識している。

保護者E

Eは共働きで、育休は取っていたが、4月から保育園に通わせているという。共働きで、仕事が忙しいということもあり、寂しい思いをさせてしまったと感じたことから、子どもとの時間を大切に、愛情を伝えられるようにしている。例えばハグをしたり、抱っこをしたり、わがままではない程度の要求には答えるようにしている。また、子どもに対して夫婦の一方が怒っていたら、もう一方は子どもの見方をするというように、一緒に子どもを責めないようにしている。

3.2 調査期間および所有時間

調査は2022年2月～9月に、半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。対象者のうち4名はオンラインで行い、1名は直接インタビューを行った。所要時間は30分から1時間程度であった。インタビューをするにあたり、研究の概要について筆者らが説明し、同意書への記入、撤回書の有無を知らせた。同意を得た上で、ICレコーダーに記録した。

3.3 調査内容

インタビューでは、まず「普段、子育てで大事にしていること」について尋ねた。子育てで大事にしていることについて答えた後には、なぜそれを大事にしているのかと質問を追加した。この質問は、子育て観とそれがつくられる背景を分析するために尋ねた。子育て観は、子どもを育てることについての考えや信念(角野・藤崎, 2022)のため、子育てについてどう思うかを直接尋ねることもできたが、本研究では、出生順位の視点から子育て観を分析するため子育てで大事にしていること、意識していることを尋ねた。

次に、「子育てをする際に、きょうだいの出生順位による長子らしさや末子らしさなどを感じることはあるのか、あればどのようなことか」を尋ねた。この質問をするにあたり、まず対象者自身のきょうだい構成について尋ね、次にきょうだいの中での自身やきょうだいの役割について尋ねた。その後、対象者の性格や出生順位による役割と対象者の子どもの性格や人格が似ているかどうかを尋ねた。この質問は、対象者が子どもに求める性格や人格は、自身の出生順位による経験によって生み出された長子らしさや末子らしさといった考えが影響している可能性があることを確かめるため尋ねた。

次に、「子どもにどのように育てほしいか、子どもの将来への期待は何か」「将来、どのようなきょうだい関係になってほしいか」といった子育て観の中でも将来への展望について尋ねた。この質問により、現代の子育て観と出生順位による子どもへの期待の差異の有無について分析できるのではないかと考えた。さらに、将来への展望の理由を尋ねていく中でどのようなことが影響して、きっかけとなって、出生順位に対する考えやイメージを持ち始めたのか、対象者自身のきょうだいの出生順位に対する考えやイメージが子育て観に影響しているのではないかと考えた。

3.4 分析方法

インタビュー内容は対象者の承諾を得て IC レコーダーに録音した。その録音した回答内容について、逐語録を作成してデータ化した。本研究では、出生順位による差異がある過去の子育て観が現代の子育て観にどう影響しているのかを分析していく。具体的には、子育てがつけられた背景と現代の子育て観の2つの面から分析する。

3.5 倫理的配慮

本研究のインタビュー調査を実施するにあたり、事前に研究目的、質問項目および個人情報の取り扱い、所属機関名の非特定化、データの保管方法について書面と口頭にて説明し、同意書の返送をもって同意が得られたものとみなした。また、調査に対する参加・拒否・中断の自由についても説明し、同意を得られた場合に限り、調査協力者とした。なお、本研究は三重大学教育学部の研究倫理審査委員会の承認を得ている。(承認日 2022年3月17日、承認番号 No.2021-21)

4. 現代の子育て世代が持つ子育て観がつけられた背景

結果として、①育ってきた環境、②保護者自身の生き方やこだわり、③日常的な経験、の3つが子育て観がつけられる要因となっていることが示唆された。

具体的には、①保護者自身が自分の育った環境と同じように育てたい、もしくは、反面教師的に自分の育った環境と違うように育てたいというように、対象者の保護者の子育て観(つまり過去の子育て観)が何らかの形で影響しているという語り为中心的にあった。しかし、過去の子育て観が影響して現代の子育て観をつくったと読み取れる語りがあったものの、それは対象者の語りのみから読み取ったもので、実際に対象者の保護者はどのような子育てをしていたのかは不明である。さらに、対象者がもつ現代の子育て観は、過去の子育て観によってつけられたものか、自身がきょうだいとともに過ごす中で生まれた出生順位に対する考えやイメージによってつけられてきたのか、どちらかを語りから考えることは困難である。よって、第5章では過去の子育て観と対象者自身から生まれた出生順位に対する考えやイメージという二つの観点から分析を行う。

また、②、③については、②保護者自身の生き方やこだわりが子育てをするときにも表れてい

ることが中心的な語りや、③子育てをしている中で、子どもへの接し方変えるようになったなど、子育て実践や職業などの経験が現代の子育て観をつくっていることが中心的な語りがあった。

一方で、これらの育ってきた環境などが子育て観に影響するものの、それだけが現代の子育て観をつくる背景にあるわけではなく、時代の様々な変化の影響や青年期以降の様々な人たちとの関わりなどの影響も受けているのではないだろうか。インタビュー対象者は30~40代で、ここ30~40年では、性別役割分業意識が少しではあるが減少していたり、女性の社会進出、LGBTQ における人権問題等が取り上げられたりするようになり、価値観や考え方などが変わってきていると言えるだろう。そういった時代の変化の中で子育てに対する考えが変わってきている人達が今回のインタビュー対象者であることを念頭に置いておきたい。

対象者の語りを交え、育ってきた環境、生き方やこだわり、日常的な経験がどのように現代の子育て観をつくっているのかを分析していく。対象者の発言については斜体で示し、前後に筆者の解釈を加えた。また、インタビューで、子育てで大事にしていることや子どもへの期待について尋ねたのは、その答えがその人の「子どもを育てることについての考えや信念」、つまり子育て観であると考えたからである。

4.1 育ってきた環境によってつけられた子育て観

保護者自身が育ってきた環境によってつけられた子育て観について、2つの観点から分析していく。1つは、現代の子育て世代の保護者(インタビュー対象者)の保護者の子育て観、つまり過去の子育て観が現代の子育て観をつくるという観点、もう1つは、保護者(インタビュー対象者)から生まれた出生順位による長子らしさや次子らしさという考えやイメージが現代の子育て観をつくるという観点である。

1つ目の現代の子育て世代(インタビュー対象者)の保護者の子育て観(過去の子育て観)が現代の子育て観をつくるという観点について考察する。Bへのインタビューの初めに、対象者に対して「子育てで何か大事にしていることはありますか。」と尋ねた結果として、対象者が育ってきた環境が子育て観をつくっていると推察される語りを見ていく。以下は、Bの子育てで大事にしていることについての語りである。

B: いろいろあるんですけど、1番で言うと、大人の言うことに従わせるっていうことをしないようにはしてる。大人の言うことが絶対みたいな、そういう感覚にならないように、自分で判断できるように、言葉かけみたいなのは、意識するようにはしてるかなっていう、ところかな。1番はそこ。(中略) 1つは、自分の育った環境っていうのは、1つあるかなという部分。そんなにこう、ガミガミと親からこうしなさいって言われたことが基本的に僕はないっていう部分。あと、やっぱり教師してるっていうところは大きいかんと思って。(中略) それぞれが意見ちゃんと、思ったこと言ってみたいなところが、教師やってて大事やなって思うし。この先の社会に出たときに必要な力っていう風には感じてるので。

このように、保護者B自身は幼少期より保護者から口うるさく言われたことがないという環境で育ってきた。保護者Bは自分自身が実践する子育てで大事にしていることの1つとして子どもを大人の言うことには従わせず、子ども自身で何事も判断できるようになることを目指して、日常的な言葉かけを意識することを挙げている。つまりは、保護者Bが子育てで大事にしていることとして「子どもの意思を尊重し、自分の判断で行動させるようにする」ことが推察される。また、保護者Bが自身の幼少期に受けた子育て、つまりは過去の子育て観から影響を受けていると考える。ただし、保護者Bの保護者本人の語りではなく、実際にどのような信念を持って過去に子育てを営んでいたかは定かではない。

次に、長子らしさなどといった考えやイメージが現代の子育て観をつくるという観点からAの語りを見ていく。A自身のきょうだいの中の役割を聞いていくと、その役割はAにとってのきょうだいの出生順位による長子らしさなどといった考えやイメージになっていることが語りから読み取れる。

まず、A自身のきょうだい構成を尋ね、その後A自身のきょうだいの中での役割があるのかどうか尋ねたのが以下の会話である。Aは4人きょうだいで、姉、A(長男)、弟、弟というきょうだい構成である。

筆者: きょうだいの中での自分の役割みたいなってありますか。

A: 強いて言うなら、何かをやるってなった時に、見本っていうか、1番最初にじゃあ俺が

やってみるっていうのは、僕の仕事みたいな感じですかね。親戚とかが集まって、1番最初に会話を切り出すのは、お兄ちゃんやろみたいな空気があるので。(中略) 1番前で、前線に出て行くみたいなのは僕みたいなのはちっちゃい頃からよくあったなと思いますね。

筆者: お姉ちゃんじゃないんですか、それは。

A: お姉ちゃんではないですね。(中略) お前長男やったらもっとしっかりしてろとか、次男とかお姉ちゃんよりも、家の中にいたら長男は1番頑張ってるなあかんみたいな空気をちっちゃい頃から感じていたんで。(中略) 風潮がずっとありました。長男1番頑張れ感はあるんで。すごい真面目にやらなきゃって思っていました。ふざけてたらあかんやろっていう。

筆者: 期待を背負ってたって感じですか。

A: そうですね。人一倍頑張らなとか。家族が困ってたら1番考えて行動しなあかんとか。そんなのは、自然と勝手な意識の中にありました。

このように、A自身は幼少期からきょうだいの中で長男としての役割を感じながら育ってきた。具体的には、Aには姉がいるが、長男でもあることから、長男はきょうだいの見本として行動し、真面目で、家族のために1番考えて行動するという役割を感じていた。

この長男としての役割は、「自然と勝手に意識の中にありました。」というAの語りから、きょうだいの長男として育ってきた中でA自身から生まれた、長男らしさといった考えやイメージではないかと推察される。ただし、長男としての「空気をちっちゃい頃から感じていた」「風潮がずっとありました。」という語りから保護者Aの保護者の子育て観が影響していることも推察される。さらに、Aが持つ出生順位に対する考えやイメージ(長子など)について、金山・笹山(1997)は、長子は「誠実」というステレオタイプがあることを明らかにしている。この「誠実」因子の中で、「頼りになる」、「きまじめである」、「責任感が強い」ことが挙げられている。これらはAがもつ出生順位による考えやイメージと類似している。つまり、A自身が持つ長男に対する考えやイメージは独自の考えではなく、一般的なものであると推察できる。よって、Aがもつ出生順位による考えやイメージ(長子らしさなど)は、A自身がきょうだいの長男として育ってきた中で生まれたのか、社会の中でつくられたステレオタイプによって影響されたのかは定かではない。

そして、このAの長男はきょうだいの見本となり、真面目で、家族のために1番に行動しないとイケないという出生順位による考えやイメージが、A自身が持つ子育て観に影響していると推察されるのが以下の語りである。

筆者： 今、お子さんはお2人とも、女の子じゃないですか。自分(Aさん)はその長男ってものを背負って育ててらっしゃって、長女、次女ってどう見えてるんですか。

A： 長女のお姉ちゃんの方には、ある程度いろんなことを我慢してあげてほしいっていうのをやっぱり言いますね。やっぱ(妹は)言葉もわからへんし、危ないこともわからへんからそこはお姉ちゃんから判断してあげてほしい。妹見てる時はしっかりしててね、みたいな。(中略)

筆者： その時のお子さんの反応ってどんな感じなんですか。

A： あ、わかったみたいな感じですね。思っている以上に頑張ってくれるっていう感じですね。(中略)なんか妹の見たテレビ番組に合わせてくれたりとか。優先してお姉ちゃんとしてなんかこう妹に譲ってあげてくれるところがあって、またそれをね、やっぱ頑張っていてありがたうって褒めたりして。そこはすごくありがたい、でもそうやってほしいなっていうところも思ってるし。

このようにAは自分の子どもである長女に対して、妹のためにいろんなことを優先したり、危険なことは判断したりすることを期待している。この期待の背景には、A自身が長男として家族が困っていたら1番に考えて行動していたことから、同じ長子であるAの子どもの長女に対して妹が困っていたら考えて行動できるように期待していることが推察される。つまり、Aが持つ出生順位による考えやイメージ(長子らしさなど)をAの子どもに期待しているということが推察される。一方で、妹は幼く、年齢的に言葉や危険なことが判断できないため、言葉が判断できる年齢の高い者としての長子らしさを期待しているとも推察される。

以上のことより、Aのきょうだいの中の役割から生まれた出生順位による考えやイメージ(長子らしさなど)から、Aの「言葉が分からない末子に対して長子が判断し、優先してあげてほしい」という子どもへの期待に影響している推察され

る。また、Aの語りからその期待は過去の子育て観の一部のように、長子に長子らしさ(後継ぎなど)を期待するという意味ではなく、長子は年齢が高く、言葉が判断できる者として見なされていることが読み取れる。つまり、末子が特別に扱われているわけではなく、今は幼いから長子に長子らしさを期待してしまうことが推察される。

4.2 保護者自身の生き方やこだわりによってつくられた子育て観

ここでは、保護者自身の生き方やこだわりからつくられたと推察される子育て観について見ていく。子育てで大事にしていることは「子どもがやりたいことを優先している」というAの語りを見ていく。Aは子育てで大事にしていることは何かという質問に対し、たくさんあると答え、その中でも重要度が高いものは何かと尋ねると以下のように答えた。

A： 子どもファーストであることですね。全部。例えば、子どもが何何したい、宿題終わってお父さんに本読んでほしいとかがあったら、僕がなんかしても、そっち優先。(中略)土曜日に、「どこどこ行きたい。」と子どもが言ったら、行こう、公園行こう。動物園って言うたらよし、連れてってやろう。全て子どもファーストで生活するっていうのが、今心がけてることですかね。

筆者： それってかなり難しいことじゃないですか。

A： いつもなんか金曜の夜とかになんか土日したいことあるかって聞いたら、一緒にお絵かきしたいとか、おままごとがしたいとか言ってるんで、午前中とうとうと一緒にやるかとか言ったりとか、午後からは、かあかあと一緒に買い物行こうとか言ってる、ずっと一日目はその子どもがしたいことばかりしているわけではないので。普段これしたいって言うたら、それを優先する。我慢させるっていうのは、まだそんなに、させてないかなあていう感じですね。

このように保護者Aは、自分自身が実践する子育てで大事にしていることの1つとして、語りから、「全て子どもファーストで生活する」ことを大事にしている。子どもファーストとはどういうことか、具体例を聞いていくと、子育てをしている保護者Aが基本的には子どものしたいことを我慢させずに、願いを第一に優先させていることが読み取れる。つまりは、保護者Aが子育てで大事にしていることとして「子どもがしたいことを優

先し、我慢させない」ことが推察される。

また、子どもがしたいことを優先し、我慢させない理由として、Aは筆者の以下の質問に対し、次のように答えた。

筆者： 仕事がすごく忙しい時とかはどうだったんですか。

A： まあでも去年ぼく働いてましたけど、優先的にでも子どもと遊んでましたね。やっぱり、子どもがしたいことに合わせて、プール行こうってなったら、プール行こうって言って。だから、疲れているから嫌だとか、それは、俺は嫌だからやりたくないとかは言わずに。

(中略)

A： だって、断ったらぐずるじゃないですか。上の子はね、喋れるけど、断ったら暗い顔するじゃないですか。だから悲しいですよね。子どもと何か一緒にするために、奥さんと育てているはずなのに、自分の都合あるからお前が我慢しろって言うはちよつと筋が違うと自分は思うんで。できる限りは合わそうっていうのが奥さんといつも言っていることですね。

このように A は自分の都合で子どもに我慢させるのは筋が違うという生き方やこだわりを持っている。

また、他に子育てで大事にしていることについて尋ねると、大人が子どもの見本になることを挙げた。そしてこの方針の背景からも以下の語りように A の生き方やこだわりが見られた。

A： 大人が見本になるっていうのは結構心がけてますね。(中略) 子どもに言う前にまず自分が見本を見せるっていうのは結構意識してるかなと思いますね。

(中略)

出来てないから子どもに言われることもあるんですけど、それを大人はええねんじやなくて、ちよつと頑張ろうとしますね。

このように子どもに言うからには自分が見本になるように行動するという A の生き方やこだわりが感じられた。このように、A の「子どもがしたいことを優先し、我慢させない」という子育て観は、A の生き方やこだわりが影響してつくられていると推察される。

4.3 日常的な経験によってつくられた子育て観

ここでは、子育て実践による経験や、職業での経験など、日常生活の中で子育て観がつくられたと推察される語りを見ていく。まず、D の子育て実践による経験によって子育て観がつくられていると推察される語りを見ていく。以下は D に子育てで大事にしていることについて尋ねた後の語りである。

D： 大事にしているのはですね、子どもに対して過度な期待はしないようにして。(中略) うちやっぱり、1人目だったので、なんか教育の本とかめっちゃくちゃ読んだし。色々、こういう子にしたいっていう願望はあったし。だから、習い事とかも結構させてたんですけど(中略)自分の中で、上の子に負荷というか、期待をすごいかけちゃってたなって思って。それから、あんまり自分が期待しすぎないようにしてる、っていうところがありますね。(中略) その子が、大事にしてることを大事にしてあげたいな、というふうに思ってますね。

筆者： お姉ちゃん(第一子)今、何されてるんですか。

D： 来年受験なんですよ。なんで、自分が行きたい高校、やりたいことがあるって言って。(中略) なので、彼女がなんか行きたい所を、そうですね。

このように D は、子育てで子どもに対して過度な期待はしないようにすることと子どもが大事にしていることを大事にすることを意識している。子どもに対して過度な期待はしないようにする理由として、「1人目だったので、なんか教育の本とかめっちゃくちゃ読んだし。色々、こういう子にしたいっていう願望はあったし。だから、習い事とかも結構させてたんですけど」「上の子に負荷というか、期待をすごいかけちゃってたなって思って。」という語りからも、第一子に期待をかけすぎてしまったと感じた経験が読み取れる。

また、子どもが大事にしていることを大事にするとはどういうことか、子どもが行きたい高校ややりたいことを優先させていることが読み取れる。つまり D は、第一子の子育ての経験から、「子どもがやりたいことを優先する」ことを子育てで大事にしていると推察される。

次に、E 自身の就職活動の経験によって子育て観がつくられていると推察される語りを見ていく。以下は、E の子どもの将来への期待についての語りである。

E: 自分のやりたいことを好きなようにやっ
てほしいなと思っていて。私からここに行ったらいいんじゃないか言わないよ
うにはしようかなと思ってるんですけど、選
択肢だけは広げたいなって思
てるんで。高校生くらいまでに、いろんな
国とか場所とか、職業とかもいろいろある
ので、そういうの教えられたらいいなと
思って。結構、自分就活してて、知
らない職種とか結構あったので、も
っと昔、何か知れてたら可能性があったのか
なって。

筆者: 就活もされてたんですか。

E: そうですね、公務員とかもいろいろ就活
も普通にしてて。そうですね、なんかいろ
いろ、英語も、だからちっちゃい時にほ
んとはやりたかったと思ったので、英語は
やらせようと思ってます。今はなんか教
材とか。

あ、そんな、形だけ…教材買っただけで、
あんませずに進んでないんですけど、育
休中とかは何か一緒に見たりして。けど
まあちょっとずつ英語触れる機会がある
といいなって思っていて。もうちょっと大
きくなったら、英会話とか。たぶん英語出
来るだけで、結構可能性広がるかな。

このようにEは、自身の子どもへの将来の期待
として、「自分のやりたいことを好きなようにや
ってほしい」と語った。自分のやりたいことを好
きなようにやってほしいとは、将来の職業を考え
る際に選択肢を広げたいということが読み取れ
る。またその理由として、E自身が就職活動をし
ていて、前からあらゆる職種について知っていた
り、英語ができたりすれば、将来の選択肢が広が
っていたのではないかと考えたからだと読み取
れる。つまり、E自身の就職活動の際に選択肢が
少なかったという経験から、自分の子どもには
「やりたいことをやらせたい、そのために選択肢
を広げたい」という子育て観がつくられていると
推察される。

次に、Cの職業での経験によって子育て観がつ
くられていると推察される語りを見ていく。以下
は、Cの子育てで大事にしていることについての
語りである。

C: 子育てというと、子ども1人にですか。き
ょうだいとか関係なくっていう感じですよ
ね。大事にしていることは、本人の考えを
1番優先する。本人がどうしたいかってい
うのをなるべく、尊重するようにしています。

筆者: きょうだいについて何か子育てで大事にし
ていること、もしあれば。

C: なるべく、私は間に入らへんようにするこ

とを心がけてます。喧嘩じゃないけど、物
を取り合うみたいな時があっても、私がや
っていることをジャッジするんじやなく
って、お互いでどうにか解決じゃないけど、
どんな気持ちしたかを、だめやって言う
んじゃないって、この物とったら、相手が
多分、下の子が泣いたりするんで、それを
見て、どうしたいかみたいな、声をかける
ように心がけてます。それがダメとかでは
なくって。それを見て自分がどう感じたかな
みたいな感じで。それは気をつけるように
しています。

このようにCは、実践する子育てで大事にして
いることの1つとして子どもの意思を尊重するこ
とを挙げている。また、子ども(きょうだい)が
喧嘩したときはCが介入して止めるように指示
するのではなく、相手の気持を考えさせて、き
ょうだい同士で解決できるように声をかけている
と読み取れる。また、この語りにつき、Cが子ど
もの喧嘩に介入しない理由について以下のように
語った。

C: 大人が入れば入るほど拗れるいうか、や
やこしく話をしているなっていうのが常々
思っていて。きょうだい関係だけじゃなく、
友達関係でもそれはそうだなっと思うんです
けど。(中略) 相手の親のこともあつたりと
かして、難しい部分もあるので、(中略) き
ょうだい関係の中では、大人は介入しない
で済むような場面であれば、しないで、子
ども同士でこう、解決じゃないけど、折
り合いをつけるみたいなのを学んでほしいな
とは思って、接するようにはしてて。

このようにCは、大人が介入するほど話が拗れ
てしまうという教員としての経験から、子ども同
士の喧嘩に介入しないということが推察される。
さらに、Cには3歳の長女と0歳10か月の次女
がおり、幼い子ども(きょうだい)2人がどのよ
うに揉めるのかを尋ねると、次女が長女の工作を
壊したり、逆に長女が次女のおもちゃを取ったり
するなどが揉め事の中心と語った。そういった揉
め事が起こったときにどのように対応するのかC
は次のように語った。

筆者: (3歳の長女が)嫌がった時に、親としてど
う対応するんですか?

C: もしどうしても困ったんやつたら、助けて
って言ってくれたら助けるでていうこと
は言っていて。言わんと、勝手に介入はし
ないように気をつけようって思っていて。
おもちゃで遊ぶ時に、工作していたら、手

が届く範囲やったら、壊されるっていうのは常々伝えてるんで。

筆者：やり方は伝えるけど、それをどう使うかはあなたで決めてって。

C：そういう感じです。けどもし手伝えることがあれば手伝うから、怒ってとはそういうことではなくて、これを手伝ってほしいっていうことを、自分で言ってねっていう風には伝えていて。

次女より言葉が理解できる長女に対して、次女にされて嫌だと感じたら C に助けを求めるように伝えてあるということだと読み取れる。C はこのときも、あくまで自分が喧嘩に介入して解決に向かおうとするのではなく、長女に自分の意思で助けを求められるように伝えている。以上のことから、「子どもの意思を尊重し、きょうだいの関わり合いには保護者が介入しないこと」を子育てで大事にしていると読み取れる。そして、喧嘩したときは、相手の気持を考えさせ、子どもの意思で C に助けを求められるように声をかけていると語った。

以上のことから、育ってきた環境、生き方やこだわり、日常的な経験によってつくられたと推察される子育て観についてまとめる。それぞれの育ってきた環境や日常的な経験は異なるが、対象者の語りから類似した子育て観をつくっていると推察された。

現代の子育て観としては「子どもの意思を尊重し、自分の判断で行動させるようにする」、「子どもがやりたいと思ったことはやらせる」、「言葉が分からない末子に対して長子が判断し、優先してあげてほしい」、「きょうだいの出生順位によって差異が無いようにする」、「子どもがしたいことを優先し、我慢させない」、「子どもがやりたいことを優先する」、「やりたいことをやらせたい、そのために選択肢を広げたい」、「子どもの意思を尊重し、きょうだいの関わり合いには保護者が介入しないこと」が挙げられる。つまり、答え方は異なるが、現代の子育て観として、「子どもに対して出生順位によって差異はなく、一人ひとり個人として尊重する」ということが言えるだろう。これは、山田（2004）による「家族の個人化」のように、子ども一人ひとりに個人主義的な扱いをしていると言えるだろう。山田は、近代社会において、家族はその関係が選択不可能で解消困難を保持したまま、社会での規範（例えば、夫婦で共同行動をする）に対する選択肢が用意され、個人の意志に委ねられていることを家族の個人化として

いる。つまり、近代社会において家族は「個人の意思を尊重する」ようになってきていると言えるだろう。このように、家族が個人化されてきている現代において、子育てにおいても子どもに対して一人ひとり個人として尊重するようになってきたのではないかと推察される。

また、育ってきた環境については、過去の子育て観が影響して現在の子育て観をつくったと読み取れる語りがあったものの、それは対象者の語りのみから読み取ったもので、実際に対象者の保護者はどのような子育てをしていたのかは不明である。さらに、対象者がもつ現代の子育て観は、過去の子育て観によってつくられたものか、自身がきょうだいとともに過ごす中で出生順位に対する考えやイメージがつけられてきたのか、どちらかを語りから考えることは困難である。対象者の語りの一つに、出生順位による長子らしさなどの期待がある語りがあった。しかしこれは、「言葉が分からない末子に対して長子が判断し、優先してほしい」というように、末子が幼く、言葉が判断できないため、言葉が分かる長子に対して出生順位による長子らしさといった期待をした推察できる。過去の子育て観の一部のように、長子にのみ長子らしさ（後継ぎなど）を期待するという意味ではなく、長子は年齢が高く、言葉が判断できる者として見なされていることが読み取れる。つまり、妹が特別に扱われているわけではなく、今は幼いから長子には長子らしさを期待してしまうと推察される。

さらに、インタビュー対象者の保護者から受けた子育ては、対象者自身が子育てをするときに、手本として影響を受けている場合もあれば、反面教師として影響を受けている場合もあった。また、きょうだいの出生順位による考えやイメージ（特に長子らしさ）が見られたことから、現代の子育て観は、過去の子育て観が基盤になっているが、社会の変化に合わせて現代の子育て観に変化していることが推察される。

5. 出生順位によるきょうだいへの期待の差異

ここでは、出生順位によるきょうだいへの期待について分析していく。以下は、子どもの将来への期待について尋ねたときの A の語りである。

A： いつか自立していくけれども、ずっと心の支えではあってほしいな、お互いについて思えますね。お姉ちゃんが妹だけを支えるん

じゃなくて、やっぱ大きくなってきたら妹もお姉ちゃんが悩んだりした時に、支えれる存在ではあってほしいなって絶対思いますね。親もいつか死んじゃうし、そうなるとやっぱきょうだいだけで、唯一血が繋がっている者同士で支え合っていてほしいから (中略)

このようにAは、きょうだいがお互いに支え合う存在であってほしいときょうだいに期待している。一方で、この語りの前に、以下のように、長女に対する期待を語る場面があった。

A: 長女のお姉ちゃんの方には、ある程度いろんなことを我慢してあげてほしいっていうのをやっぱり言いますね。やっぱ言葉もわからへんし、危ないこともわからへんから、そこはお姉ちゃんから判断してあげてほしい。妹見てる時はしっかりしててね、みたいな。 (中略)

筆者: その時のお子さんの反応ってどんな感じなんですか?

A: あ、わかったみたいな感じですね。思っている以上に頑張ってくれるっていう感じですね。(中略) なんか妹の見たテレビ番組に合わせてくれたりとか。優先してお姉ちゃんとしてなんかこう妹に譲ってあげてくれるところがあって、またそれをね、やっぱ頑張っていてありがとうって褒めたりして。そこはすごくありがたいし、でもそうやってほしいなっていうところも思ってるし。

このように、言葉が分からない幼い妹に対して、長女が判断し、優先してあげてほしいという出生順位による期待に差異が見える語りがあった。その会話の流れの中での、将来のきょうだい関係について出生順位に関係なくお互いに支え合う存在になってほしいと語りがあったのである。つまり、将来のきょうだい関係について、現在の年齢のように長女が、言葉が分からない妹に対して優先してあげるような立場として支え合っていてほしいという期待ではなく、同じ立場として支え合えるようになってほしいという期待が込められていると推察される。

次に、子どもの将来への期待について尋ねたときのCの語りである。C自身のきょうだい関係について交えながら以下のように答えた。

C: 仲良くなるってほしいなというか。大人になっても2人で遊びに行ったりとか、その家族ぐるみで遊ぶような関係にはなってほしいなとは思ってはいますけど。

筆者: 一緒に遊びに行きたくないなみたいなイメ

ージってどう作られてるもんなんですかね?

C: 私もそのほんまに、弟と仲が良くなかったというか、そんな弟と遊んだ記憶っていうのがなくて (中略) 自分もきょうだい仲良かったら良かったなっていうのはあったり。あと、同性やったら、何か物を一緒に貸し借りしたり、一緒に買い物行ったりとかっていう姿とかを見てたりして、それはいいなって思ってるのがあったので。そう いう関係に2人が、娘2人がなってくれたら嬉しいなとは思うんですけど。

このようにCは、自身のきょうだい関係が仲良くなかったという経験から、子どもに対してきょうだい同士が仲良くなってほしいという期待をしている。さらに、以下は、Cがきょうだい2人に差異が出ないように意識している語りである。

筆者: 普段、例えばその、何か物を買ってあげたりとか、普段の細かい生活の中で、お姉ちゃんとか、妹やからみたいなことって、考えることってありますか?例えば、おもちゃ買うときとか。

C: 最近言えるようにしてるのは、お姉ちゃんやからとか関係ないと思うんですけど、やっぱ、きょうだいって、おもちゃ買うと自分の物っていう意識が生まれるから、友達のとことか (中略) 同じ物2個用意せなあかんとかっていうのとかを見ると、買う前にちゃんとやるとかなあかんとかっていうのは、思ったり。

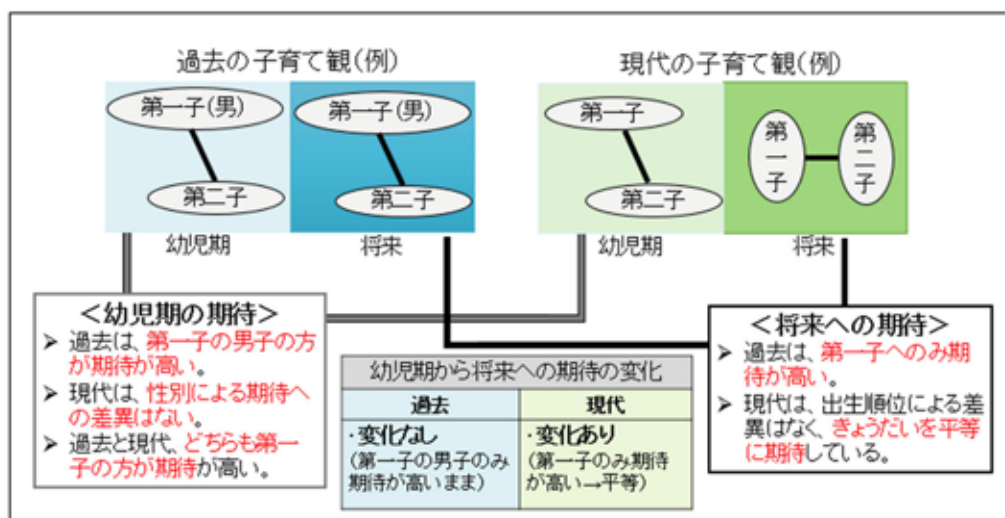
(中略)

筆者: 子どもって線引きできない、わかんないですもんね。

C: 上の子もうちょっと大きくなってたらわかってくるかもしれないですけど、下がわかってないときに、上に教えるなや、上にだけ強要するのも難しいですよ。そこってどういう風にするのかなっていう、まだちょっと見つけてないんですけど。

このようにCは、例えばおもちゃを買うときに、2人の物でも、子どもは自分の物だという意識が生まれるから、買う前に2人の物であることを言うようにしていると語った。また、2人の物だということを末子が幼くてわからないからと言って長子にだけ強要するというのは難しいと語った。このことから、きょうだいの出生順位によって差別的な扱いをするのではなく、同じ立場として接しようとしているのではないかと推察できる。さらに、上記の「きょうだい同士が仲良くなってほしい」という期待も、出生順位によってどちらかがどちらかを引っ張るというような期待

図4 出生順位によるきょうだいへの期待の差異



ではなく、同じ立場として仲良くなってほしいと期待しているのではないかと推察できる。

以上のことから、現代の子育て観として、出生順位によるきょうだいへの期待の差異はほとんどないことが推察される。過去の子育て観として、「出生順位によって子育て観が異なり、長子・男子がより期待され、大切に育てられる」傾向にあったが、現代の子育て観は出生順位による期待による語りがほとんどなかったのである。

一方で出生順位による期待、特に長子らしさを求める語りもあったが、それは、末子が幼い場合、言葉が分からない、危険なことを判断できないということから長子に対して末子を支えるような存在であってほしいということが推察される。そのことから、幼児期の期待と将来への期待において、過去と現代の子育て観では違いがあることが推察された。幼児期の期待としては、過去は、第一子の男子の方が期待が高いこと、現代は、性別による期待への差異はないこと、過去と現代、どちらも第一子の方が期待が高いことが推察された。将来への期待としては、過去は第一子へのみ期待が高いこと、現代は、出生順位による差異はなく、きょうだいを平等に期待していることが推察された。つまり、幼児期から将来への期待の変化で見ると、過去は第一子の男子のみ期待が高いまま変化がなかったが、現代は、第一子のみ期待が高い幼児期から、将来的に見れば、きょうだい同士がお互いに支え合うような存在になってほしいと期待していたことから、出生順位による期待の差異はほとんどなく平等に期待されるようになったことが言えるだろう(図4)。

6. まとめと今後の課題

本研究の目的は、現在子育てをする保護者5人を対象に、半構造化面接法によるインタビュー調査を通じて、過去の子育て観によって育てられた現代の子育て世代はどのような子育て観を持っているのかについて明らかにすることである。

分析の結果、現代の子育て観の特徴とそれがつくられた背景が推察された。そして、現代の子育て観がつくられた背景を分析する中で、過去の子育て観が現代の子育て観にどのように影響しているかについての示唆を得た。現代の子育て観がつくられた背景には、①育ってきた環境、②生き方やこだわり、③日常的な経験があることが推察された。その中でも、①育ってきた環境においては、保護者自身が自分の育った環境と同じように自分の子どもを育てたい、もしくは、これまでの生育に対する反面教師的に育てたいというような語りから、対象者の保護者の子育て観(つまり過去の子育て観)が何らかの形で影響していることが推察された。しかし、対象者の語りのみからの分析であり、実際に保護者の親世代はどのような子育てをしていたのかは不明である。さらに、対象者がもつ現代の子育て観は、過去の子育て観によってつくられたものか、自身がきょうだいとともにお互いの中で生まれた出生順位に対する考えやイメージによってつくられてきたのか、どちらかを語りから考えることは困難であると推察する。現代の子育て観としては、出生順位によって子どもへの期待に差異はなく、子どもを一人ひとり個人として尊重することや、出生順位に関わらずきょうだい同士が支え合う存在になってほ

しいと期待することが示唆された。子どもを一人ひとり個人として尊重することについて、山田(2004)による「家族の個人化」が進んでいることを挙げる。近代社会において家族は「個人の意思を尊重する」ようになってきていると言えるだろう。家族が個人化されてきている現代において、子育てにおいても子どもに対して一人ひとり個人として尊重するようになってきたのではないかと。さらに、幼児期と将来のきょうだいへの期待において、過去の子育て観と現代の子育て観に違いがあることが見えてきた。過去の子育てにおいては、第一子の男子のみ期待が高いまま変化がなかった。他方で現代の子育てにおいては、第一子のみ期待が高い幼児期から、将来的に見れば、きょうだい同士が互いに支え合うような存在になってほしいと期待していた。つまり、現代の子育てにおいては、出生順位による期待の差異はほとんどなく平等に期待されるようになったことが推察される。

本研究の課題としては、5人のみを対象とした質的な調査だったため、今後は人数を増やしたアンケートによる量的な調査を行いたい。

引用文献

- 安保真理子, 川端愛子, 西野美穂, 佐藤志帆, 佐藤信雄, 植木克美 (2020), 「夫婦間における「子育てに対する考え方」の可視化」, 北海道文教大学研究紀要 44, 37-46
- 浜崎信行, 依田明 (1985), 出生順位と性格 (2) : 3人きょうだいの場合, 横浜国立大学教育紀要, 187-196
- 依田明, 飯島一恵 (1981), 「出生順位と性格利用」, 横浜国立大学教育紀要 21, 117 - 127
- 金山富貴子, 笹山郁生 (1997), 「きょうだい型」ステレオタイプの検討, 福岡教育大学紀要. 第四分冊, 教職科編, 209 - 220
- 厚生労働省, 令和3年度「出生に関する統計」の概況人口動態統計特殊報告 <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/syusyo07/dl/gaikyou.pdf>>2023年1月3日
- 森岡清美, 望月嵩 (2009), 「新しい家族社会学」, 株式会社培風館, 13-17
- 内閣府 男女共同参画局, 世論調査, 男女共同参画社会に関する世論調査 (令和元年 9月) <<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/2-2.html>>2023年1月18日最終アクセス
- NHK 高校講座 テレビ学習メモ 家庭総合, 「第5回 女性の仕事? 男性の仕事?」 <https://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/katei/archive/kateisogo20_05.pdf>2023年1月3日最終アクセス
- 落合恵美子 (2019), 「21世紀家族へ -- 家族の戦後体制の見かた・超えかた 第4版」, 有斐閣
- 櫻谷真理子 (2004), 「今日の子育て不安・子育て支援を考える--乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて」, 立命館人間科学研究 (7), 75-86
- 角野優徳, 藤崎春代 (2022), 「乳幼児を育てる母親において, 子育てにおける怒り表出と子育てにおける怒り表出評価, 子育て観の関連」, 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 24, 63-72
- 穴戸路佳, 久保恭子, 辻由紀, 坂口由紀子, 田崎知恵子, 及川裕子 (2016), 「未就学児を養育する母親の子育て観と影響因子」, 神奈川工科大学研究報告.A,人文社会科学編 40, 27 - 31
- 苫米地なつ帆 (2012), 教育達成の規定要因としての家族・きょうだい構成—ジェンダー・出生順位・出生間隔の影響を中心に—, 社会学年報 41(0), 103-114
- 堤美智, 菊地香, 大友由紀子, 堤マサエ (2021), 「世代交代からみた農家継承の事例分析」, 日本国際地域開発学会
- 山田昌弘 (2004), 「家族の個人化」, 社会学評論, 54巻4号, 341-354